

モアイの「危機語り」
——ラパヌイにおける危機学説の形成——

後藤 明

キーワード

ラパヌイ (イースター島)、モアイ像、森林破壊

はじめに

東日本大震災で町の中央部が壊滅的打撃を受けた宮城県の東三陸町。この町は平成の大合併で志津川町と歌津町が一緒になって誕生した。穏やかな志津川湾の養殖や外洋に面する歌津町における多様な漁業で成り立っていた町であるが、東日本大震災以前からイースター島の有名なモアイ像が町内に建っていた。イースター島は現在チリ領であるが、ハワイやタヒチと同様、ポリネシアの一角、とくにポリネシアの三角形の東端を形成する孤島である。現在では現地名で呼ぶのが通例であるので以下、ポリネシア語でラパヌイ (Rapanui) と呼んでいく。

志津川町になぜモアイが建っていたかということ、1960年に発生したチリ地震津波によってこの町は大打撃を受けたあとに、津波が縁となってチリ政府からモアイ像のレプリカが送られたものであった。モアイ像は世界遺産でレプリカを取ることも禁止されているが、たびたびチリで起こった地震の津波によって被害を受けた志津川町民を励まし友好のシンボルとして贈られたのである。

しかるにこのたびの津波でそのレプリカも破損した。そして町民がプレハブの商店街「さんさん商店街」を開始したとき、シンボルとして再びチリ政府とラパヌイ島民から、現地の石で作ったモアイが贈られたのであった。

志津川にモアイ像が贈られるきっかけとなった1960年の津波であるが、そのラパヌイ島も襲われているのである。東海岸に面して建つアフ・トンガリキは10体という最大数のモアイ像が一つの台座に建っていることで有名である。現在建っているこの像は日本のクレーン会社などの協力によって津波後建てられたのだが、もともとこれらのモアイ像は長い間倒れたままだったのだ。

2013年の調査時、1960年の津波のとき「モアイが泳いだ」という伝説があるのを現地で聞いた。数トンもある石像も実際に津波で内陸に流されたようである[図1]。

このようにモアイ像は地震や津波と因縁があるのだが、本稿はラパヌイの歴史においてモアイ像が見てきたとされる危機の歴史について批判的に検討することが目的である。本稿では航海者や宣教師によって残された歴史記録と、考古学者、民族学者あるいは生態学者が書いた書物や論文をすべて「語り」と捉え、その相互影響や時代性を論ずる試みを

行いたい。



図1 10体のモアイが並ぶアフ・トンガリキ。1960年のチリ地震津波で「モアイが泳いだ」と伝えられる。

1. ファーストコンタクト

A. 最初の居住

ラパヌイを発見したのはポリネシア人である。かつて西暦3世紀という東部ポリネシアでは最も早く居住された島とされた時期もあったが、現在では確実なところは10世紀前後に居住が始まったのではないかと考えられている。神話ではヌク・ヒヴァ(Nuku Hiva)から最初の首長、ホトゥ・マトゥア(Hotu Matua)が一族を率いて居住したと語られる(Barthel 1978)。その原因自体が「海がせりあがってきたので」というので津波か高潮による被害なのかもしれない(後藤 1997; Goto 2011)。

神話が事実かどうかは置いて、実際にラパヌイがヌク・ヒヴァ島を含むマルケサス諸島方面から居住されたという蓋然性は高い。その後、付近に島のないラパヌイはポリネシアでももっとも孤立に近い状態で歴史を刻んできた。

B. 最初の西欧人：オランダ人

このラパヌイに最初にたどり着いた西欧人はオランダのA.ロッセフェーン (Roggeveen)であった。ちょうど1722年の復活祭(イースター)期間中に発見したためにイースター島という名称が与えられたのであった。彼の記録では次のようにそのときの様子が描かれる：

(頭目が指揮して)果物、芋、家禽などが並べられた。少しすると大量のサトウキビ、鶏、ヤムイモやバナナが持ってこられた。われわれは身ぶりでそれらがみな必要なわけではないと示した。われわれがもらったのは60羽の鶏とバナナ30束でそれに対してリンネル布を払った。それには彼らも大変満足した様子だった(Rapanui Museum 2004: 27)。

人々は体型もよく、大きく強い筋肉をしている。背も高く、肌は黒いと言うよりも薄い

黄色か青白い感じであった・・・これらの人々は雪のように白い歯をもっていて、老人も歯が丈夫そうであった・・・土地はよく耕されており畑には囲いがあり、・・・宗教のことは短期滞在ではわからなかったが石像の崇拜がそれを示唆した。大きな石像の前で火をたいて、人々がひざまずいて手を合わせて上げ下げしていた。こんな大きな石像をどうやって造って運び、立てたのかは不思議だった(Rapanui Museum 2004: 31)。

このように島民は健康そうな様子で描かれている。また生産システムについては：

気がついたことにこの土地は砂地でないだけではなく、逆にきわめて豊かで目を見張る大きさのバナナや芋やサトウキビやたくさんの種類の果物を生産している。ただし鶏以外の動物や家畜はいなかったが。この土地は豊かな土地と気候を考えてみた範囲では、適切に耕せば地上のパラダイスになることもありうるだろう(Rapanui Museum 2004: 37)。

ポリネシア人がアジアから運んできた食用の家畜には豚、犬、鶏がいたが、ラパヌイには鶏しか到達していなかったのは事実であった。さらに景観についてロッセフェーンは大きな「木はなかった」と記したが、同行したドイツ人の C.ベーレンス(Behrens)は、「島は木と森に覆われている」と書いている(Pelta 2001: 18)。この西欧人発見時の植生記述の矛盾については今日まで謎となっている。

さてロッセフェーン一行の記録に関する記事が直後の英国の新聞に引用され、「彼らの性質は完全に穏和である・・・土地は豊かで住民はこれ以上望むものはないようにしているので、彼らの仕草は柔らかくで人間的にしている・・・彼らは地面の下の洞穴や穴のような構造物に住んでいて、巨大な大きさの石像を拜んでいる」と描かれた(Pelta 2001: 23)。

C.スペイン人の来訪

ロッセフェーンのあとしばらくは西欧人の到来がとぎれていたが、次に来訪したのはスペインのドン・フェリペ・ゴンザレス(Don Felipe González)であった。彼は1770年に来てモアイ像について詳細な記録を残している。さらに人々が健康そうな様子であることを記す：

われわれが最初ピラミッド型の茂みだと思ったのは、本当は大きな石像で原住民が崇拜した偶像であった。それは石で出来ていて大きな柱のようだった。精査するとそれは一つの石から彫られていて、帽子はもう一つ別の石から彫られていた。・・・(このあと、モアイの詳しい記述)・・・彫られた像は Moay と原住民が呼んでいる。彼らは像を大きな尊敬をもって保っているように見える、そして我々が調査のために近づくのを喜ばない・・・(彼らは金属など持っていないので)持ち物は貧しいが・・・背が高く、がっちりしていて手足のバランスも格好がよい。彼らには諸々の身体障害者はみあたらず、外観はまったく喜ばしくアメリカ・インディアンよりはヨーロッパ人に近い。私は彼らの従順さと知性からみて、どんな宗教にも改宗できるように思われた(Rapanui Museum 2004: 59-60)。

ただし戦争のためか傷を負った者もいたとする。しかし弓を与えるとまったく使い方を

理解していない様子も同時に記している。

私は彼らの勇気を試す機会はなかったが彼らは小心者のように見える。彼らは武器をまったく持っていないが、体に乾き傷を負った者がいた。それは鉄かなにかで切ったようだが、(鉄はもっていないので)その傷は石(黒曜石)でついたものであろう。それが彼らの唯一の武器でありその鋭い刃が傷を付けることができる。私は実験的に弓矢を作って一人の男にやると、彼はすぐそれを手づかみにして矢を頭に刺してかんざしのようにし、弓を首にかけて喜んだ。彼らは弓矢の使い方と効果をまったく理解していないようだった。同じようにナイフも使い方を知らないようだった。彼らはナイフを無頓着に刃をもったり柄をもったりした(Rapanui Museum 2004: 63-4)。

ゴンザレスも陸上動物は、家畜の鶏およびポリネシア人が知らずに持ち込んだはずのネズミ(動物)のみしか見ていない。また畑は小さいがヤムイモ、サツマイモ、サトウキビなどが栽培されていたと書いている(Rapanui Museum 2004: 65)。味はよくないというが、多様な作物が植えられていることを記している：

われわれが2リーグ歩くと(その間中、住民はみなついてきた)約1/4リーグほどの畑が伸びているのを見た。幅は長さの半分くらいであった。それ以外に小さな畑があつてサトウキビ、サツマイモ、タロイモ、ヤムイモ、白いヘチマ、マットを作るための植物などが栽培されていた。われわれは彼らがかんで、体中に塗りたいく黄色い染料の植物の根もみた(ウコン?)(Rapanui Museum 2004: 89)。

D. ジェームズ・クック(英国)

ゴンザレスはモアイ像がまだ建っていて崇拜されていた様子を描いているが、その二年後に訪れた英国のジェームズ・クックはモアイが倒され始めている状況を書いている。ゴンザレスとクックの記述の食い違いはどちらかが間違いなのか、それとも短期間にモアイを倒すような意識変化が起こったのか大きな謎である。

クックの1774年3月15日の記述にはこうある：

見渡す限り、土地は乾燥し堅い粘土のような感じで荒涼とした印象であったが、にもかかわらずサツマイモを植えた大きな畑がいくつかあった・・・東側で彼らは石作りの基壇3基と遭遇した。基壇というよりその廢墟に、であるが。それぞれの基壇の上には4つずつ石像があつたが、二つの基壇の上の像はすべて倒れていた。もう一つからは一個の石像が倒れていた。一つを除いてそれらは倒壊のために壊れていた・・・(これを越えて)島でもっとも豊かな土地に来て彼らが見たのは、所々にサツマイモ、サトウキビ、ネッタイバショウ(バナナ)などであり、これらの土地は前に見たような石ころが混じる状態ではなかった・・・彼らはまた小屋を通りかかると、そこの主人は調理したサツマイモとサトウキビを一行になって進んでいる彼らに一人一人手渡した(Rapanui Museum 2004: 281-282)。[図2]



図2 アフ・ビナプの倒れたモアイ。現在立っているモアイはすべて修復されたもので、クック艦長到来時はこのような風景が島中にあったと思われる。

E. それ以降の初期の記述

1793年と1795年に二度訪れたイギリスのチャールズ・ビショップ(Charles Bishop)船長は次のように書いている：

われわれが通り過ぎると、たくさんの人のよい原住民が丘の斜面に座っていて、その丘はサツマイモ、サトウキビ、ヤムイモや他の根菜類で覆われていた。ほとんどすべての村は海岸に彼らの方に向かって人間の形を意図した像を持っていた。それらはとても粗野な作りで20フィートほどもあった(cited in Richards 2008: 19)・・・出港する前に男たちは今日もたくさんのすばらしいサツマイモを持ってきた。われわれは半トンちかく獲得したが鶏は三羽だけだった・・・(彼らは子供を大事にする)彼らは親切で穏和なので彼らがかつて言われたように食人集団ではなかったと私は確信している・・・その証拠に彼らは武器をひとつも持っておらず、皮膚に傷や痣も見あたらない。私が想像するに、彼らの主食はイモであり、鶏と魚が加わるであろう。島の周りには魚がおり草で作った上手な網や骨で作った釣り鉤を用いていた(cited in Richards 2008: 21)。

1804年に来訪したロシアのリジアンスキー(Lisiansky)船長は「彼は原住民にプレゼントをするとお返しにサツマイモ、ヤムイモ、バナナ、サトウキビの棒などが戻ってきた。食料の質はよく、ジューシーだったので、土地は豊かであることを示している。木はなかった。住民は裸で肌黒かったが体はよくできており幾分かたくましく見える」と書いている(cited in Richards 2008: 26)。

1821年に訪れた交易船サリー(Surry)号の記録には「谷や丘の斜面は原住民の勤勉さを示しておりすべて耕されていた。サツマイモやバナナの畑はその整然とした状態はこのような程度の人々に期待できるものを遙かに超えていた」とされる(cited in Richards 2008: 35)。

次に1822年に来たアメリカの捕鯨船フォスター(Foster)号では「彼は原住民からたいそうな礼儀正しきで扱われた。彼らは5~6000人はいたように見える。彼らはしばしば二つに分かれて戦争をしていた。そして戦争が起こると捕虜はことごとく殺された。彼らは彼にサツマイモや果物をほしだけ供給した」(cited in Richards 2008: 37)。

翌1823年に来たイギリスの捕鯨船スプリング・グローブ(Spring Grove)号の記録では「海

岸は赤みがかった黒で土は良質に見える。彼らはサトウキビ、ヤムイモ、サツマイモを大量に栽培している。これらの島の産物と豊富に産するあらゆる種類の貝類が彼らの生計を形成していた」と記される(cited in Richards 2008: 39)。

このように戦争や争いがあったかどうかは異なる記述が見られるが、19世紀の初めまではラパヌイ島は比較的豊かな島であり、飢餓や激しい戦争の様子はほとんど描かれていないといつてよい。

しかしこの間、ラパヌイの人々は西欧人によってひどい扱いを受け始めていたことは年表の1805年のナンシー(Nancy)号、1822年のパンドス(Pandos)号などの事例から知ることができる。

このようにむしばまれていくラパヌイ島民にとどめをさしたのはなんと言っても1862年の奴隷商人による島民拉致であった。このとき南米から来た奴隷商人によって千人あまりの島民が拉致され、グアノ(肥料になる海鳥の糞)の採集のための奴隷として会社に売られたのである。これを知ったタヒチ司教のチリ政府への働きかけで100人が帰ることになったが、85人が天然痘と結核で死に、生還したのは15人だった。ところが彼らが天然痘や結核を島に持ち込んでしまったのだ。

2. 「危機」語りのはじまり

A. 「危機学説」の形成

次にラパヌイの歴史が大きく変わったのは1864年にユージーン・エイロ(Eugene Eyraud)神父が布教に訪れたことであった。彼は最初は撤退したが、1868年に再来し島民をキリスト教化することに成功した。二度目の布教のときアメリカの軍艦トパーズ号が来訪し、暴力を振るったり、文化財を持ち去ったりしたようである。

エイロ神父は結局、結核によって島で命を落とすが、このとき島民に結核をうつしてしまっていたようだ。さて島民は西欧船による度重なる狼藉や奴隷狩りによって心身ともにずさんでいった様子が描かれる：

(はじめて上陸しようとしたとき、偵察にやったダニエルという言葉の少しわかる男が、急いで船に戻ってきて船長と気色ばんで話す場面)「俺は1000ピアストレくれたってあそこには戻らねえ！あいつ等とはとんでもない連中だ。槍を持って脅してきやがった。ほとんどのやつが裸だった。飾りの羽や入れ墨をする者、奇声を発する者がいて、もっと怖い。しかもあそこにはペルーに行った連中が持ち帰った天然痘が蔓延しているぞ！・・・(エイロ神父に向かって)船長があんたを安全にタヒチに連れて行ってくれるぜ。悪いこと言わないから上陸するのはあきらめな。病気になっちゃうからな」(cited in Altman 2004: 5-6)・・・(エイロが反対をおしきって上陸したとき)男たちは槍を持っていて、その先には鋭い石がついていた。原住民は大きく、体格もよく、ハンサムで太平洋の住民よりもヨーロッパ人に似ていた(cited in Altman 2004: 8)。

エイロ神父に同行したルーセル神父も記録を残しており「[戦争に敗れて]生き埋めにされた者もいた。あるいは絞め殺された後、石蒸炉で焼かれたものもいた。他の者は斧で体を

バラバラにされてはらわたが飛び出すまで蹴飛ばされた。あるいは絶命するまで小さな火であぶられる者もいた。捕虜は老若男女を罰するありとあらゆる野蛮な手段が取られた」(cited in Altman 2004: 43)。

これらの記述がどこまで信憑性があるのか不明である。しかしラパヌイ島が次第に殺伐とした世界になっている雰囲気が伝わってくる。このあとフランス人の冒険家が起こした騒動で島民の対立が激化し、最悪の場合、島は無人的になってしまうような状況であった。次に1872年に来たのがフランスのピエール・ロティ(Pierre Loti)であった。彼は当時、フリゲート艦の見習士官であったが後に文筆家となり、その上手な文章のために広く読まれてラパヌイのイメージ形成に大きな影響を与えた。彼の筆致をみてみよう：

石塚の近くに、石灰化した顎骨や頭蓋骨の山があるのは、長い年月、そこで人間が生贄にされてきたことを示すものだろう。さらにもう一つの謎は、まるでローマ時代の道路のような、石を敷き詰めた道が海まで続いていることだ。最もこの島では、顎骨や頭蓋骨は至る処に転がっている。ちょっと土を掘れば人骨にぶちあたる。まるで島全体が巨大な納骨堂のようだった。かつて恐ろしい時代があって今でも古老たちはそのときの恐怖を語る。かつてある時期、ラパヌイの人口が増えすぎて島から脱出する術を失った人々は餓死の恐怖にさらされた。その結果部族間に皆殺しの戦いと人食いの習慣が広まったのだ。これらのことは西洋人がオセアニアの存在さえ関知していなかったときに起こったのだ。18世紀になってヴァンクーヴァーがこの島に立ち寄ったとき、島の人口はすでに2000人そこそこしかなかった。山々にはまだ塹壕をめぐらした野営地の跡が残り、噴火口の周囲には要塞の柵の残骸が転がっていた(cited in Altman 2004: 93)。

B. 最初の「民族誌」

ロティの記録は多分に文学的であるが、最初の民族誌的な記述は1882年に来訪したドイツ人のW. ガイスラー(Geiseler)によって残されている：

人肉食はずっと昔に実践されていたが今は絶えている。もっとも年寄りの人々は、戦争の捕虜はたいてい食べられていたと覚えている。捕虜がたくさん捕まると、彼らはそのために特別に建てられた石像の前に作った小屋に連れて行かれた。捕虜は戦勝記念の式典までは餌を与えられて生きているが、式典で殺されて神に捧げられる。捕虜の女や子供は殺されないが、未婚の戦士に与えられる。繰り返すがこの風習は女性の不足から来ている。高いランクの戦士が敵に倒されるとその魂を滅ぼすために頭蓋骨が焼かれる。そうすると想像できる限りのひどい状態でさらされる(cited in Ayres and Ayres 1995: 65)。

代表的な武器は黒曜石の先端をつけた槍であった・・・サツマイモがラパヌイの人々にとっての主食であるので、大量に作られている。この主食に加えて、彼らの食事においては魚介類がもっとも大事な役割を持っている。他の利用できる食料はヤムイモとバナナだが、後者の量は限られている(cited in Ayres and Ayres 1995: 72-73)。[図3]



図3 黒曜石の「鏃」とされる遺物（右上：ラパヌイ博物館展示）

また1886年に来たアメリカのモヒカン(Mohican)号のW.トムソン(Thomson)は会計係であったが、短期間で伝説など貴重なデータを集めた。しかし彼らも文化財を持ち帰った。彼は武器についても有名な記述を残している：

住民の攻撃や防御の武器は黒曜石の先のついた槍、短い棍棒、投石器だけであるが、驚くほど巧みに使われる。これらの使い手や名人は色々な土地で色々な人々によって繰り返して語られる・・・練習が足りないのだから今の住民は使い方がそれほど上手ではないが、話が本当だとすれば昔の人々は(・・・このあとギリシャの名手に喩える表現が続く)・・・長い槍と短い槍があって、これらの元型は投げやり型であった伝説によるとこの投げる武器は長耳族の殲滅の戦いのときに使われた。槍は下手投げで投げられる(Thomson 1891: 475)。

槍が下手投げというのはハワイなどと同様で正しいようである(後藤 2008)。またトムソンは現在まで解読ができていない謎の文字ロンゴロンゴ(Rongorongo)を古老に解読させたことで有名である。このとき後にハイエルダーらが歴史的事実と考えた「短耳族」と「長耳族」の対立の話を聞いたとする。

しかしこれには後日談がある。トムソンは、ロンゴロンゴの読み方を昔習ったという古老に読んでくれと言ったが古老は宣教師に禁止されているからと断った。しかし宣教師がタヒチに持ち帰ったロンゴロンゴの写真を見せて、これならいいだろうと言って読ませ、途中でトムソンが持っているロンゴロンゴの写真とすり替えるというトリックを行った。しかし古老はそれに気づかず続けて「長耳族」殲滅の物語を語った。ロンゴロンゴをすり替えても同じ話が続いたので、この老人はもうロンゴロンゴの文字はすっかり忘れてしまい、彼は文字を読んでいたのではなく、おそらくトムソンを喜ばせるために、ただ覚えている伝説を語っていただけのような感じだった(Pelta 2001: 60)。

C. さらなる民族誌・考古学誌

専門的な訓練を受けた調査は1914年に英国女性キャサリン・ルトリッジによって行われた。彼女は17ヶ月という長期にわたって滞在し、モアイ像のカタログ化を行い、伝説なども収集した。

1934年から35年にはベルギー・フランスの調査隊が訪れ、その中で著名な民族学者のA.

メトロローが民族誌を残している。それは今日でも貴重な内容であるが、メトロローは東西部族の対立というイメージを形成する言説を行っている：

イースター島の政治的生活はわれわれが宣教師の伝説や説明を通してかいま見たところ、部族間の絶え間ない戦争と競争であった。とくに東と西部族との間で(Metraux 1974: 100)・・・もし捕虜の中に首長がいるのがわかったら彼は食べられるだけではなく頭蓋骨は彼の非道を罰するために焼かれた。

1935年にはドイツ人のエングラート(Englert)神父が来訪、詳細な調査を行う。彼は現在のラパヌイ博物館の基礎を作るなど貢献した人物である。とくに神父はハンセン病施設でホトゥ・マトゥアの直系と言われる人物からの聞き取りを行う。エングラートは長耳族と短耳族の古戦場ポイケ溝の戦いのたった一人の生き残りの子孫という人の話を聞き、世代の数と一世代15年という推定値から1680年ころだと推測していた。また1771年から1773年の間にさらなる部族間戦争が起こり、モアイは完全に倒されたと推測した。これはロッセフェーンやゴンザレスは争いを見ず、クックが見たのと符号する。これはメトロロー仮説とも合致している(Pelta 2001:80)。

次に触れるべきはノルウェーの考古学者、T.ハ(ヘ)イエルダール(Heyerdahl)である。コンチキ号の実験航海で世界に名をはせたハイエルダールは、ノルウェー隊を率いて来訪し3期説を唱える。彼はエングラートの唱えた1680年を戦争開始とモアイ倒しの始まりと考える。これはハイエルダールが溝から得た1676年という放射性炭素年代の数値と近かった(Pelta 2001: 84)。

彼の学説を要約すると次のようになる。島には2種類の民族、長耳族と短耳族がいた。後者がポリネシアから来た先住民、後者は新大陸から来てアフやモアイを作った高度な集団。短耳族は長耳族の労役をさせられる立場で地面の石を取り除く作業に明け暮れていた。短耳族はがまんができなくなり長耳族に反乱を起こした。長耳族はポイケ半島に立てこもり、防御のためにポイケ溝を掘った。その中に木や枝を投げ入れて火をおこして防御するつもりだった。しかし策略によって短耳族が砦に進入し、長耳族をことごとく溝に投げ入れ火を付けてほとんどを焼き殺してしまった。生き残りはたった三人、うち二人は串刺しにして殺され、一人だけ許され短耳族の女と結婚し、その生き残りがいまでもいる(ヘイエルダール 1975: 195-196)。

その後、短耳族が夜寝ていてもしゃがんで膝を抱いて寝るのが習慣だった。それは寝ていてもすぐ起きられるようにであった。長耳族の子孫の村長が言うには「フリ・モアイ」の時代にはすぐ戦えるようにしておかなくてはならなかったからだ。島を独占した短耳族は今度は自分たちで争いを始めた。争いの時は相手のモアイ像を倒した(ヘイエルダール 1975: 225-226)。

ポイケの溝では火が燃やされた証拠はあるがその年代は推定年代1680年よりも500年も古く、おそらく調理の跡とか、ゴミを燃やしたあとではないか。また人骨が全く発見されないので多くの研究者はポイケの戦いを疑っている(Pelta 2001: 98)。

3. 考古学者・植物学者・生態学者による危機の語り

A. 考古学者・P.カーチ

P.カーチ(Kirch)によると噴火湖、ラノ・ラナクから採集された土壌コアに含まれた花粉分析から人間が引き起こした森林伐採の証拠は 146 年から 676 年の間に見られる。アナケア湾からは西暦 900 年に遡る人為的堆積層があり、その中には 25 種類の鳥の種が含まれ、うち現存するのはたった 1 種類だけである。鳥類の減少は人類の捕食によると思われ、900 年には遅くともこの時期には人類が到達していた証拠とする。

森林伐採の時期や原因はわかっていないが、燃料、舟製作あるいはモアイの運搬のためと思われる。似たような状況のマンガイア島では最大人口が 3000 人と推定されるが、ラパヌイはその三倍の面積があり、火口以外は耕作可能であったので、人口は最大 1 万くらいあったのではないかと推測できる。石像の建造がいつ始まったかは不明だが起源 1100 年頃の小さな石像は発掘されている。その後の「後期先史時代」では社会不安と崩壊過程が考古学的記録でよく示されている：黒曜石の槍先の製作、エリートに住居の破壊、洞穴への避難住居、人肉食、埋葬方法の変化、アフ(モアイ像の台座)の製作からオロンゴにおける鳥人の崇拜というイデオロギーの変化、等。

カーチは考古学的な証拠を総合して次のような年代を考える：

1. 初期居住期：A.D. 300-900? 小さな集団の居住。海鳥や魚介が重要な資源。

2. アフ・モアイ期：1000 (or 1100)-1500

首長集団の権力増大、生産統制。アフ＝台座を持つ巨大なモアイが競争的に建てられた。庶民の家は内陸に伸びていた。楕円形の家跡、manavai と呼ばれる小さな穴の中で風をしのいでバナナや作物を植える施設。サツマイモは枯れた土地でもよく育った。この状況下で「政治的経済は建築的な顕示に向かう螺旋状の競争に傾いていった (2000: 272-3)。

3. 退廃期(decadant)あるいはフリ・モアイ(Huri Moai＝モアイ倒し)期：1500-1772

アフ・モアイ期の 500 年の間、人口過多の状況化で行われたモアイ製造競争によって森林破壊が起こり、カヌーを作る木さえ欠乏する、同時に土地の生産力も落ちて行き、集団間の争いが激化し、モアイ倒し戦争が始まった。古いモアイを新しい台座に利用するような風習は内乱のはじまりを意味した。古いモアイを台座の中に再利用もされたが、新しいモアイの彫刻は続いた。マタア(mata'a)と呼ばれる黒曜石製石鏃の増加、焼けた人骨の増加は戦いと食人のはじまりを意味する。権力は伝統的な首長からマタオア(matatoa)と呼ばれる戦士階級に移っていった。ポイケ溝から出土した年代も西暦 1420-1810 年でこの値も退廃期の戦争激化に矛盾しない。やがて伝統的な首長制ではなくあらたに台頭した戦士階級が社会を牛耳っていく。モアイ信仰は廃れ、鳥人信仰が興ってくる。これは部族間の争いを緩和する目的もあった。

このような過程を要約すると、階層化と中央集権化へと向っていた傾向が、無政府状態へと変換したといえる。太平洋において信じがたいほどの建造物を造り出した権力関係は、これらのイデオロギー的シンボルが支配し制御しようとしていた生態系そのものへの圧力を生き延びるほど十分ではなかった(Kirch 2000: 275)。

B. 植物学者・バーンとフレンリー

ラノ・カウ火口の花粉分析から最初はハウハウ(hauhau)という植物が卓越していたことがわかる。これはロープの材料として使うことができた。西暦 750 年あたりになると、木々は減少し、950 年にはほとんど伐採されてしまった。木々を示す花粉は西暦 1400 年頃に最小となる。そのあと若干回復はあったが、そのあとメリア(meilia タヒチでは milo)という灌木が歴史時代に導入された。西暦 1400 年という数字は 1680 年と推定される島文明の崩壊の年代の前であるので重要である。文明の崩壊に森林伐採が先んじていたからである。

干ばつが森林減少の原因ともされるが、それはもっと穏やかに進行するはずで、このような急激な減少は人間による森林伐採がおそらくネズミの被害によって増長されたものと思われる(Bahn and Flenley 1992: 177-178)。

ロッヘフェーンは「島は大きな木が欠乏している」、ゴンザレスは「幅 6 インチ以上の長さを持つくらい太い木は一本もなかった」、フォレスターは「10 フィート以上の高さを持つ木は島中さがしても一本もなかった」と記述ある(Bahn and Flenley 1992: 172)。

最後の木を切り倒した人はそれが最後の木であることを知っていたはずである。しかし彼あるいは彼女はそれでも切り倒し・・・人間の強欲は際限がない。その利己性は遺伝的に組み込まれている。利己性は生存に通じ、利他性は死につながる。利己的な遺伝子が勝利する。しかし限界ある生態系において利己性は人口のアンバランス、人口崩壊、そして究極的に絶滅をもたらす (Bahn and Flenley 1992: 214)。

またメトロウの記録に触れて、1980 年代でもいかに島民が鳥の卵をむさぼり食ったか、一本だけラノ・カウに生えていた木の成長を嫉妬深く観察して小さな像を彫るために今か今かと成長を待っていた、それはいかに資源への態度、木や卵への飢えを今日まで残しているか、ということを示しているという(Bahn and Flenley 1992: 218)。

C. 生態学者 J.ダイヤモンド

本格的にこのような考古学者の仮説を世界的視野の著作の中で採用したのが著名な人類学者ジャレド・ダイヤモンドの『文明崩壊』(2011)である。その 2 章で「イースター島に黄昏が訪れるとき」においてラパヌイは西暦 900 年までには人類が居住していたとする。そのとき亜熱帯の森が広がり、海鳥、陸鳥などの資源も豊富だったが、急速にそれらは人間の捕食によって絶滅してしまった。またネズミイルカやマグロなど外用性の動物も捕られていたがそれらもおそらくカヌーの欠如によってとるのが不可能になったとする。

巨大なヤシや今は姿を消した種々の樹木の絶滅について理由は 6 つある。(1) 薪の使用、火葬にも使われたのは焼けた人骨からも推測される。(2) 耕地拡大のための伐採、(3) カヌーへの使用、木材と紐用の植物利用、(4) ネズミが椰子の実を嚙った。

森林破壊は 900 年以前に人間が定住した後どこかの時点で始まり、ロッヘフェーンが到着した 1722 年までには終了していたはずだ。ヤシの実の例は放射性炭素で 1500 年以前とわかっているのでヤシが希少となったのはそれ以降だろう。ポイケはもっともやせた土地で、このヤシは 1400 年ころまでに姿を消している。森林開発に由来する木炭は 1440 年頃に消えている。1640 年頃以降になると木炭に代わって草や芝やサトウキビの屑が燃料として使われたことがわかる。

フレンリーのデータでは 900 年から 1300 年の間にヤシや数種類の灌木の花粉が消滅し、それに替わって草と芝の花粉が現れる。火葬ができなくなり、土葬ないしミイラ葬になっ

ていく。高台の農園のデータによると農園が運営された時期と石像に使われた木材や紐の消費が最大になった時期とすると15世紀から17世紀まで存続したようだ。ラノ・カウで採取したコアサンプルによると、土壌内の金属イオンの量が激増していることから森林破壊に起因する風雨による局地的な土壌浸食が起こったものと思われる。ポイケ半島では1400年頃耕地が放棄されるが、1500年ころ草原が定着したために農業が再開された。しかし枯渇および養分の溶脱によって堆肥に使っていた野生の植物の葉、実、小枝の大部分は失われていた。やがて争いと人肉食へと墮していき、あばら骨の浮き出したモアイ・カヴァカヴァ(Moai Kavakava)像は極端な飢餓状態を表す[図4]。その結果1400年から1600年間の最盛期から1700年までに70%の居住遺跡が減少している。

結論からすると森林破壊は人間定住後に始まり、1400年ころに最盛期を迎え、場所によるばらつきはあるが15世紀初頭から17世紀ころに終了したものと思われる(2012: 216-217)。そして彼は有名な次の一節を続ける：

私はよくこんな風に自問した。最後のヤシの木を切り倒したイースター島民は、その木を切りながら何と言ったであろうか、「テクノロジーが問題を解決してくれるから、心配は要らない。木に代わるものが見つかるさ」？あるいは「もうこの島には木がないと証明されたわけじゃないから、もっと探してみないと。伐採を禁止するなんて早計だ。悲観論に踊らされているんだよ」？不用意に環境を損なってしまった社会については、例外なく、同じような疑問が取りざたされる。それなのに、なぜ数々の社会が同じような過ちを犯すのだろうか？(ダイヤモンド 2012)



図4 あばら骨の浮き出したモアイ・カヴァカヴァ像 (ラパヌイ博物館展示)

4. 危機語りへの疑問

A. 危機の物的証拠と疑問

さてラパヌイの危機や社会崩壊の証拠とされた事例をいまいちどまとめてみよう：木のない景観、倒れたモアイ、暴力を受けたと思われる人骨、あばら骨の浮き出した木像モアイ・カヴァカヴァ、人肉食に使われたと思われる洞窟、武器と思われる黒曜石の石槍ないし石鏃、鳥人信仰(サーリンズの秘儀的繚乱論: Sahlins 1955)。

このような証拠に対して近年の研究から疑問が提示されている。

骨学的な研究によるとラパヌイの人骨では虫歯の割合が通常の農耕民のそれより倍近く高い。虫歯の以上な高い割合は、肉類の欠如で炭水化物に過度の依存の結果ではないかと思われる(Gill and Owsley 1993: 57)。

ここの食生活で虫歯の原因を考えると、サトウキビ、サツマイモ、タロイモくらいであり、むしろそれらをたくさん食べていたということになる。それ以外ではきわめて健康的な集団であった。疫病的には若干の鉄分とカルシウムの欠乏は推測されるがカロリーのには問題なかったようである(Van Tilburg 1994: 107)。

民族学者 A.メトローは争いなどがあつたことを推定しているが、その反面、人々がバランスのとれた食生活を送っていたと結論した。彼が話を聞くたびに、人々が食べていた食料のリストができあがった：ヤムイモ、タロイモ、サツマイモ、鶏、鰻、伊勢エビ、そして魚(Pelta 2001: 73)。メトローは次のようにも言っている：

島はポイケ半島を除いて隅々まで耕されていた・・・土地はそれゆえ豊かであるが、その豊かさゆえわれわれは島民の努力を無視しがちである。彼らの労働はたいへんなものである。彼は畑から石を除き、サツマイモやタロイモを植え雑草を追い払うために小さな土の塚を盛り上げねばならない。川はないので水分を保ち太陽から作物をまもるために工夫が必要である。タロイモは西欧の感覚からするとわざと「いじめる」状態にする、つまり石の間に植えてその子が太陽から守られ、湿気を保つようにする。このように一見すると劣悪な状態のために作物はより大きく、実り豊かになる。火山の土の斜面に掘られた畝はときに雨水を保つこともある。

カジノキは風でだめになりがちだが、自然ないし人工の穴の中に植えることで生育する。食えてそれらは低い石垣で守られる。野菜のくずが播かれて日がたつとそれは厚い堆肥層になる。同じ施設はタロイモやティが植えられると、手間が掛からず生育する(Metraux 1974: 63-64)。

ラパヌイは確かに乾燥する大地の上で、岩陰や洞窟の入り口に畑を作り、あるいはタロイモの芽を石で覆うなどの乾燥防止の智慧はもっており、筆者はその効率を過小評価はできないのではないかと考える[図 5]。

さらにジルとオースレイによると、後期の衰退期に起こつたであろう戦争の数やその規模は誇張されてきたのではないかと、という。さらに初期の航海者やコレクターは意図的に「面白い」頭蓋骨を集めていた。たとえば穴が開いたものとか傷がある骨とか。これが今残されているサンプルに統計的なバイアスを与えている可能性がある(Gill and Owsley 1993: 58)。もちろん喧嘩とか小競り合いが起こり、それで怪我をすることもあつたが死に至らしめるような争いはなかつたと思われる。傷を持っている事例もあつたが、たいてい

は治癒していた(Van Tilburg 1994: 107)。

戦争の証拠とされる石鍬マタア(mata'a)はラピタ文化やメラネシアの石鍬的な人工物に似ているが、それが武器であった証拠、あるいはその増加が戦争の激化の証拠と確定されたわけではない。儀礼的ナイフかもしれないし、メローは大きな魚や人間(動物の肉?)を切るためのナイフであった、と推測している。十分な研究がなされるまではおびただしい数のマタアだけをラパヌイにおける際限ない戦争が頻繁だったことへの証拠と引用し続けるのは安直である(Van Tilburg 1994: 109)

しばしば言われる食人にしても同族内食人(主に死者の哀悼のため)と異部族間食人の二種類があり、ラパヌイにおける意味づけもはっきりしていない。ラパヌイ人が人肉を食べる風習が蔓延していたといういかなる仮説も考古学的にはまだ示されずにいる(Van Tilburg 1994: 110)。



図5 石垣で囲った畑 (アフ・トンガリキ附近)

B. 新たな考古学的見解

フレンリーらは 656～1550 年間に人為的な森林伐採があったというが、人類が持ち込んだネズミの方が影響が大きかったという意見がある。また木質の燃料から草本の燃料へと急激にシフトしたことは 17 世紀後半でありこのときこそ森林がなくなったのであって、森林消滅は長期的なプロセスではなかった。

戦争の証拠とされる黒曜石の石鍬は、15～16 世紀に出現し、18～19 世紀に繁栄するが、使用痕の分析ではむしろ農耕具であった可能性が示唆されている。エリート用の住居といわれる船型の住居の破壊と再利用は年代が特定されていない。洞窟住居の増加も同様でその居住は先史時代の後半から歴史時代に連続するようである。

焼けた人骨や傷ついた人骨が戦争や人肉食の証拠とされるがその割合は低く、また年代も先史時代という保証はない。人骨の釣針利用も食人の証拠とは言えない。また埋葬法の変化であるがアフの埋葬用利用や洞窟の埋葬用利用は先史時代からずっとあり、最高のピークは接触後である。鳥人信仰がモアイ後という解釈だがオロンゴの発掘では 15～18 世紀という年代が出ているので、鳥人がモアイの後に出たという保証もない。セトルメントパターンから主張された人口の激減減少も保証されない。それが明らかなのは接触後である。考古学者の T.ハントは次のように述べている：

最初に私がラパヌイに来て考古学的調査をしようとしたとき、私はこのようなストーリーを補強することができるかと期待していた。しかし私は、これらの証拠は基本的な時間軸に合わないという証拠を見いだした・・・私はラパヌイの先史時代について言われてきたことの多くは憶測に過ぎなかったと悟った。今や私は自己が生み出した環境崩壊がラパヌイの衰退を説明はしないと確信している (Hunt 2006: 2)。

人口はおそらく西暦 1350 年ころ最高で 3000 人かもう少し大きいくらいであったろう。それ以降はヨーロッパ人の到来までかなり安定的であった。ラパヌイの環境的な制約が、人口がもっと増大することを制御していたのであろう。ロッセフェーンが 1722 年に来たときには島の木のほとんどが消えていたが、森林の消滅はダイヤモンドや他の人々が論じているように社会的な崩壊の引き金ではなかった。むしろネズミによるヤシ種子の食餌が主なる原因と考えられる (Hunt 2006: 12)。

ハントはラパヌイを終焉させたのはジェノサイドであってエコサイドではなかったと主張する。彼は続ける。生態学的な危機は確かに訪れたが、それはたくさんの要因の複合であって、人間の近視眼からではなかった。確かに現在際限ない地球規模の破壊に世界は貧しているし、環境破壊に対する歴史的事例の警鐘的意義は疑えない。しかし科学者として自分は島の先史時代の受容されてきた物語に潜む問題を無視することはできない。環境の保護を訴える議論における誇張は答えを過度に単純化している (Hunt 2006: 13)。

犠牲者(ラパヌイ島民)が犯人にされた、とハントは結論づける。今日エコサイドの概念は一般に流行して受け入れられているが、本当はジェノサイドがラパヌイの人々と文化に終焉をもたらしたのだ。不幸にも文化的そして物理的壊滅の犠牲者が、自らの終焉の演出者とされてしまったのだ (Hunt 2007: 498)。

C. さらなる危機への疑問

植物学者のマン(Mann)らもフレンリーらが採用した花粉分析の結果に疑問を呈する。それは土壌サンプルデータの不確実性で、フレンリーのデータを精査するとポリネシア人の居住当時のデータは彼らが湖から採取して分析した土壌コアの中で欠如しているか非常に攪乱している。ラノ・アロイ(Rano Aroi)湖では 19,000 年前の放射性炭素年代が土壌表面から得られている、一方現在を示す年代は 1 メートルの深さから出ている。過去 200 年以上にわたる生態学的な継続区的な記録は皆無なのである (Mann et al. 2003: 139)。

多くの「危機語り」の研究者はロッセフェーンの木が生えていなかったという記述が全島の的に当てはまると考えるのに、モアイは建っていたという観察は部分的であるとして恣意的な読みをしてきたのではないだろうか。また冒頭で紹介したように、同行したベレンスが島は木々で覆われていたという記述をしているのにである。

マルルーニらもセトルメントパタンから主張された人口の激減減少も保証されないとしている。それが明らかに起こったのは接触後である。先史時代の崩壊のオーソドックスなシナリオは非常に限られた考古学的データに基づいて確立され、物象化されたものが明らかであるとする (Mulrooney et al. 2009: 147)。航海者の記録でも島民が健康的な様子が描かれている。戦争も描かれていない。モアイ倒しはクックによって初めて記録された。また

その後の民族誌、トムソン、ルトリッジ、エングラート、メトローらは著しい難しい状況で書かれたもので読むときには注意する必要がある(Mulrooney et al. 2009: 148)。

またよく言われる土壌の劣化はポイケ半島で確認されているが、ポイケ半島のような限定的な地域の地形的浸食を全島の的に拡張して考えることは是認されていない。生産性のない(marginal)レベルから中庸程度である土壌の特徴は、水の有無や森林伐採より栄養素の有無とより関係する。ラパヌイのマージナルな土壌の性質は森林伐採に先立つ土壌の浸食で発達したのではない。より貧困な層の露出によって起こる土壌層の浸食は小さな地域に限定されており、これらの出来事は人類が到達する以前に起きていた。

フレンリーらは森林破壊は人々が意図的に運搬や農業のために木を切るような人為的な変化だと仮定しているが、人間ではなくネズミが椰子の実を食い荒らした結果森林の輪廻にもっとも主要な役割を果たしたとも考えられる。このような考え方かわりに、オルリヤック(1988)らが示しているように、木質の燃料から葉質の燃料への劇的な変化は 17 世紀後半に起こっているのは、長期的な森林伐採ではなく、急激な環境変化を意味しているのである。環境的な劣化が社会的な過程の原因であったという考えは古生態学的データから現在では指示されないアプリオリな仮定に基づいていた(Mulrooney et al. 2009: 143-144)。

おわりに

以上、ラパヌイにおける「危機の語り」について文献記録をもとに再検討を行ってきた。本稿では様々な「語り」の分析は不十分であり、基礎的な資料の提示に終わった感があるが、今後もそれらの「語り」のもつパラダイム性の分析を続けていきたい。

さてラパヌイを世界的に有名にしたモアイ像は倒されていたのは事実である。しかしそれは島民の先見の明の欠如による環境破壊とその延長上にあるモアイ倒し戦争なのか、それともクック船長来訪直後から始まった、おそらく外生的な価値変化からなのか、結論は出ていないのである。津波によって倒されたという可能性も否定できない。ただ確実に言えるのは、ラパヌイ島民が被った明らかな危機は 18 世紀初頭の西欧人による拉致、暴力、また外来的な病気の蔓延なのである。

今はきわめて穏やかな、癒しの島であるラパヌイであるが、2016 年の年賀状で日本人ガイドの最上賢二氏から島でも 2015 年には島民デモが行われたと聞いた。それは観光開発や経済格差など様々な矛盾へのプロテストであるようだ。これからもラパヌイはわれわれが指標とすべき「小さな地球」でありつづけるだろう。そのためにも様々な語りを総合的に検討し、歴史を正しく認識していくことを怠ってはならない(McCall 1981, 2010; Pelta 2001)。

年代	出来事
1722	オランダのロッセフェーンが復活祭の時(4月)に発見、上陸。
1770	スペインのドン・フェリペ・ゴンザレスがサン・カルロス島として領有を宣言。
1774	イギリスのクックが到達。
1786	フランスのラ・ペルーズが到着。
1805	アメリカの帆船ナンシー号が武力で12人の男と10人の女を拉致。隙を見て逃げ出した島民は海に飛び込み大半が死ぬが、泳いで戻ることの出来た者もいたらしい。
1816	ロシアのオットー・フォン・ゴツビューが来訪。島民から攻撃をうけ反撃。
1822	捕鯨船バンドス号、3人の島の娘を連れ去り、船上で慰みものにしたあと甲板から投げ捨てる。副艦長ワンデルは島民を的にして射撃遊びに興じる。
1825	イギリスのF.W.ピーチーのプロッサム号来訪。島民から攻撃をうけ発砲。
1838	フランス人のアベル・デュプティ・トゥアール提督寄港。タヒチをフランス領と宣言した人物。
1862	めの奴隷として会社に売られた。タヒチ司教のチリ政府への働きかけで100人が帰ることになったが、85人が天然痘と結核で死に、生還したのは15人。彼らが天然痘や結核を島に持ち込む。
1864	らせた島民パナを通訳にして、ある程度布教は成功したが、島民に身ぐるみはがれて一度離島。
1866	再来したエイロ神父の努力によってキリスト教の布教が軌道に乗った。島民は600人まで減少していた。ルーセル神父もエイロ神父に同行。
1868	全島民がキリスト教に改宗した。アメリカの軍艦トパーズ号が来訪。300人の島民の力を借りて、オロンゴ儀礼村に残っていた家を破壊、ホア・ハカ・ナナ・イアと呼ばれる巨像を略奪した。再来していたエイロ神父が結核で死去。島民に病気をうつした模様。
1870	フランス人の冒険家ジャン・パティスト・デュトル・ポルニエ(1868年に来訪)が島民の対立を激化させ暴力沙汰となった。宣教師は島を脱出。タヒチの農園経営者ブランデルが島民に移住を勧めるとほぼ全員が希望。しかしポルニエがじゃまをしたので125人が残った。もしそれがなかったら島民はゼロになっていただろう。
1872	フランスのフリゲート艦フローラ号が到来。ピエール・ロティが見習士官として乗船。倒れているモアイの頭を切り取って持ち帰る状況を描く。
1882	ドイツの海軍大尉ウィルヘルム・ガイスラーが来訪。民族学者・バスティアンの依頼で、会計係ワイサーの助力もあり、もっとも早いかなり本格的な民族調査。最初の本格的な民族資料収集を行う(100点弱がベルリン博物館に収蔵)。
1886	アメリカのモヒカン号が来訪。会計係のウィリアム・トンプソンが初めて本格的な考古学・民族学の調査を実施。しかしオロンゴ遺跡の家を破壊、彩色された敷石を持ち去る。
1886	アメリカ人ウィリアム・トンプソンが来訪。短期間に伝説など貴重なデータを収集。
1888	チリ政府がブランデルの息子から土地を購入、島全体がチリ領となる。
1901	統治権がチリ海軍にゆだねられた。
1914	英国女性キャサリン・ルトリッジは17ヶ月滞在中に石像について詳細な調査、また伝説の最後の継承者から聞き取り。
1934-35	フランス・ベルギー調査隊来訪。民族学者A.メローの本格的民族誌(史)
1935	セバスチャン・エングラート神父が来訪。石像のカタログ化や伝承の記録など貴重な研究を行う。現在のラパヌイ博物館の基礎をつくる。
1955	ハイエルダールの調査隊来訪。
1957-58	ドイツ・チリ調査隊。1955年に発見された手記の獲得。1840年生まれのプア・アラ・ホア・アラブによって現地語で書き残されハンセン氏病施設で秘密裏に伝えられた手記を、現地の人間の助力で編集・翻訳。ドイツのバルテルが『八番目の土地』として発表。
1960	チリ地震津波で10mの波が島を襲う。
1966	チリ政府政令によって島はパスクワ島と改名、バルパライソ州の管轄下に置かれる。
1979	外国資本の投資が厳しい制限をうける法律制定。島民とチリ政府以外にこの島で土地を所有するのは禁止。9割の土地は政府の領土拡大事業部が保有あるいは国立公園の一部。

年表

参照文献

Ann M. Altman

2004 Early Visitors to Easter Island, 1864-1877: The Report of Eugmène Eyraud,

- Hippolyte Roussel, Pierre Loti, and Alphonse Pinart. Los Osos: The Easter Island Foundation.
- Ayers, William S. and G.S. Ayers (eds.)
1995 Geiseler's Easter Island Report: An 1880s Anthropological Account. Asian and Pacific Archaeology Series, 12.
- Bahn, P.G. and J.R. Flenley.
1992 Easter Island, Earth Island. Thames and Hudson: New York.
- Barthel, Thomas S.
1978 The Eighth Land: the Polynesian Discovery and Settlement of Easter Island. Honolulu: The University Press of Hawaii. (Originally published in 1974).
ダイヤモンド、ジャレド
2012 『文明崩壊：滅亡と存続の命運を分けるもの』(上)、草思社文庫。
- Englert, S.
1972 Island at the Center of the World: New Light on Easter Island. New York: Charles Scribner's Sons.
2001 Legends of Easter Island. Hangarua: Rapa Nui Press.
- Flenley, John R.
1993 The palaeoecology of Easter Island, and its ecological disaster. In: S.R. Fisher (ed.), Easter Island Studies: Contribution to the History of Rapanui in Memory of William T. Mulloy, pp. 27-45. Oxford: Oxbow Books.
- Gill, George W. and Douglas W. Owsley
1993 Human osteology of Rapanui. In: S.R. Fisher (ed.), Easter Island Studies: Contribution to the History of Rapanui in Memory of William T. Mulloy, pp. 56-62. Oxford: Oxbow Books.
- Goto, Akira (後藤 明)
1997 『ハワイ南太平洋の神話』、中公新書、中央公論社。
2008 『カメハメハ大王』、勉誠出版。
2009 Mythicization of Tsunami in the Ryukyu Islands: a process of seascape formation in island societies. The Gotland Papers, Selected Papers from the VII International Conference on Easter Island and the Pacific: Migration, Identity, and Cultural Heritage, p. 465-471. Gotland University Press.
- Heyerdahl, Tor
1961a Reports of the Norwegian Archaeological Expedition to Easter Island and the East Pacific, Vol 1. Monograph of the School of American Research and the Museum of New Mexico 24(1).
1961b Reports of the Norwegian Archaeological Expedition to Easter Island and the East Pacific, Vol 2. Monograph of the School of American Research and the Museum of New Mexico 24(2).
- ヘイエルダール、トール
1975 『アクアク：孤島イースター島の秘密』、社会思想社 (Originally published in 1958)。

Hunt, Terry.

2006 Rethinking the fall of Easter Island: New evidence points to an alternative explanation for a civilization's collapse. *American Scientist* 94 (5).

2007 Rethinking Easter Island's ecological catastrophe. *Journal of Archaeological Science* 34: 485-502.

Hunt, Terry and C.P. Kipo

2007 Chronology, deforestation, and "collapse:" Evidence vs. faith in Rapa Nui prehistory. *Rapa Nui Journal* 21(2): 85-97.

Kirch, Patrick V.

1982 *The Evolution of the Polynesian Chiefdoms*. Cambridge: Cambridge University Press.

2000 *On the Road of the Winds: An Archaeological History of the Pacific Islands before European Contact*. Berkeley: University of California Press.

Kirch, Patrick, V. and Terry L. hunt (eds.)

1997 *Historical Ecology in the Pacific Islands: Prehistoric Environmental and Landscape Change*. New Haven: Yale University Press.

Kirch, Patrick V. and Jean-Louis Ralu (eds.)

2007 *The Growth and Collapse of Pacific Island Societies*. Honolulu: University of Hawai'i Press.

La Pérouse, Jean-François de Galaup

1994 *The Journal of Jean-François de Galaup de la Pérouse, 1785-1788*. London: The Hakluyt Society.

Mann, D., J. Chase, J. Edwards, W. Beck, R. Reanier, and M. Mass

2003 Prehistoric destruction of the primeval soils and vegetation of Rapa Nui (Isla de Pascua, Easter Island). In: Loret and Tanacredi (eds.), pp. 133-153.

Mulrooney, Mara A., T.N. Ladefoged, C.M. Stevenson, and S. Haoa

2009 The Myth of A.D. 1680: New Evidence from Hanga Ho'onu, Rapa Nui (Easter Island). *Rapa Nui Journal* 23(2): 94-105.

Mulrooney, Mara A., Thegn N. Ladefoged, and Christopher M. Stevenson

2009 Empirical assessment of a pre-European societal collapse on Rapa Nui (Easter Island). In: P. Wallina and H. Martinsson-Wallin (eds.), *The Gotland Papers*, pp. 141-153. Gotland University Press.

McCall, Grant

1981 *Rapanui: Tradition and Survival on Easter Island*. Honolulu: The University Press of Hawaii.

2010 The end of the world and the end of the earth: retrospective eschatology on Rapanui (Easter Island). S. Jobb and L. Conner (eds.), *Online Proceedings of the Symposium: Anthropology and the Ends of Worlds*, pp.1-10. Department of Anthropology, University of Sydney.

Métraux, Alfred

1940 Ethnology of Easter Island. B.P. Bishop Museum, Bulletin 160. (Reprint by Bishop Museum Press, 1971).

1974 Easter Island: A Stone –Age Civilization of the Pacific. London: Book Club Associations.

オルリアック、カテリーヌ・ミッシェル、オルリアック

1988 『イースター島の謎』、知の再発見双書 52、創元社。

Pelta, Kathy

2001 Rediscovering Easter Island: How History is Invented. Minneapolis: Ldrner Publications.

Rapanui Museum (ed.)

2004 Easter Island: the First Three Expeditions. Hangaroa: Rapanui Press.

Richards, Rhys (ed.)

2008 Easter Island 1793 to 1861: Observations by Early Visitors before the Slave Raids. Los Osos: Easter Island Foundation.

Routledge, K.

1919 The Mystery of Easter Island. London: Hazell, Watson, and Viney. (reprinted in 1998 by Adventures Unlimited Press, Kepmton).

Sahlins, Marshall

1955 Esoteric efflorescence in Easter Island. American Anthropologist 57(5): 1045-1052.

Tilburg, Jo. A. van

1994 Easter Island: Archaeology, Ecology and Culture. London: British Museum Press.

Keywords

Rapanui (Easter Island), moai, deforestation